

株式会社オフィスビル総合研究所

本田広昭

日本では歴史的建造物の保存と継承はうまく行われているのだろうか？ 多くの人は、1400年以上も昔に建てられた法隆寺に代表される古都の社寺仏閣、日光東照宮や町中のお寺や神社、お城も結構残されていて世界に誇れるのではないかと答える人は多い。

都市部ではどうか？ 勢い、歴史につつまれた美しいヨーロッパの都市と比較となり、眉をひそめて「日本はヒドイよね！」と答える人もまた多い。

一般市民の間では、このようななんともちぐはぐな会話で、日本の歴史的建造物の保存に関する評価が語られている。

「江戸」・・・世界一美しい都市だったといわれる町並みが残されていれば、パリやロンドンに引けをとらずに胸を張って自慢できるということなのだろうか？ とはいっても、時代劇や錦絵でみる江戸の町は、さすがに近代国家の都市としては成立しないだろう。

また、法隆寺に代表される歴史的建造物の建築的構造、つまり木造対石・コンクリート造の違いに着目せざるを得ない。木造による柔構造が、巨大な地震エネルギーを吸収して生き延びてきた我が国の歴史的建築物に対して、近代化で導入された西洋建築の構造である石やコンクリートは、重力や風雨への対応力がその要となるからである。つまり地震大国における西洋建築の課題が浮上する。

そして、日本が誇る社寺仏閣の宗教的建築物の保存とそれ以外の建築物保存の背景は全くの別世界である点だ。特に都市部では、歴史的建造物といえども不動産資産としての活用が前提となるため、土地の高度利用政策としての容積緩和がもたらす保存への不利益増大の問題、つまり建て替えた方が有利になってしまう現行制度下における活用保存の課題を解決しない限り、日本近代化遺産としての歴史的建築物の保存継承に有効な手立てを見つけないのではできないのではないだろうか。